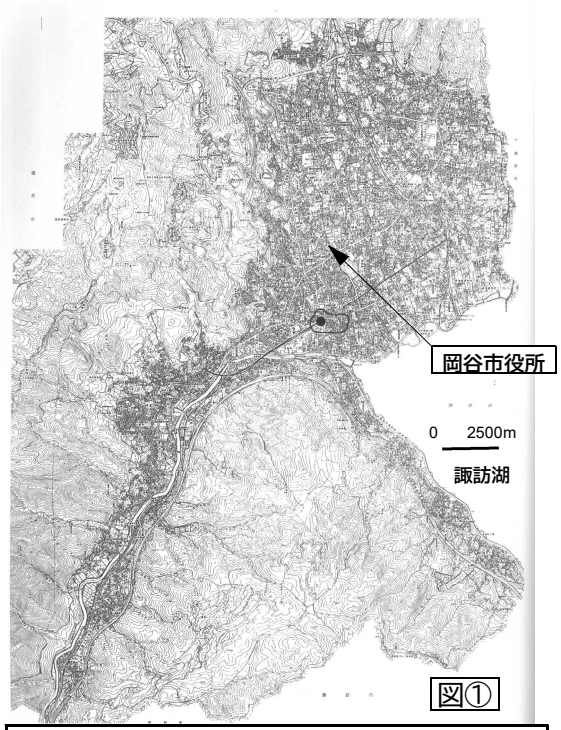
岡谷市史編さん室だより『覧古考新』No.27
2025(令和7)年　4月
岡谷市教育委員会生涯学習課
岡谷市史編さん室 編集・発行
岡谷市中央町1-11-1 イルフプラザ3F
TEL 0266-78-8455
WEBはこちら

覧古考新 ：古い事柄を顧みて、新しい問題を考察すること
～岡谷の歴史を深く思い、岡谷の今を重ね、岡谷の未来が拓けるような新しい市史をめざして～

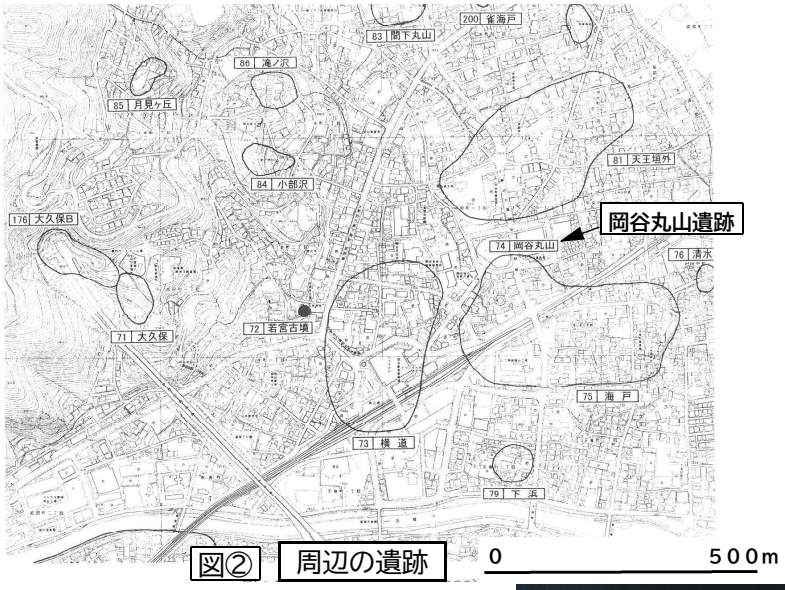
やがらけんまき「矢柄研磨器の研究」報告書の発刊！！　～覧古考新 考古編 ②～

平成14年に発掘調査をしました岡谷丸山遺跡西区の報告書が発行されました。

調査では、日本では初めてとなる「二本が並んでいた一対の矢柄研磨器（やがらけんまき）」が出土し、びっくりするような発見と話題となりました。また、その大きさも桁外れで、各々長さ約23ｃｍ、重さ約1.4kgと、これまでに発見された矢柄研磨器の数倍ありました。当時、発掘調査の指導をしてくださった岡谷市出身の元明治大学学長戸沢充則氏から「国重要文化財級の発見」と評価されました。その後縄文時代草創期の遺物が確認され、また、約2000点に及ぶ石鏃（せきぞく：石のやじりのこと）が確認されたことで、矢柄を作る石器である矢柄研磨器の重要性がより増しました。他に、重さ3.86kgの黒曜石が出土していて、矢の製作に必要な石鏃がたくさんあり、これらの遺物は岡谷丸山遺跡が矢作りの拠点であったことを示していると考えられています。

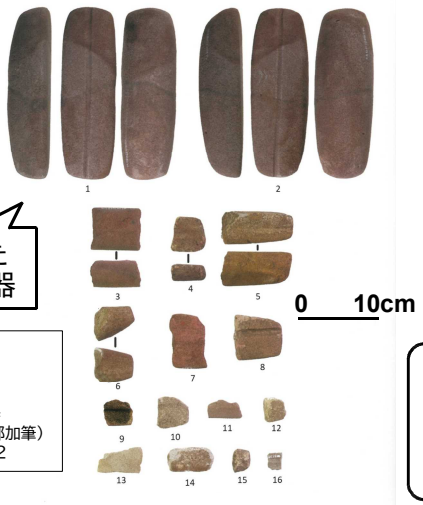


図①
岡谷市内における遺跡の位置（●調査地点）



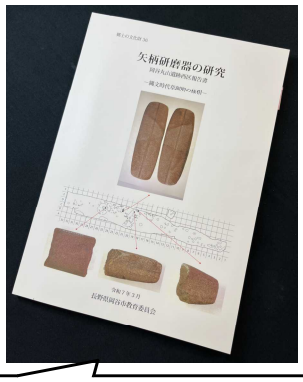
図②　周辺の遺跡

写真①　矢柄研磨器出土状況



写真②
発見された矢柄研磨器

図・写真出典：
『「矢柄研磨器の研究」
岡谷丸山遺跡西区報告書
縄文時代草創期の様相』
令和７年３月刊　岡谷市教育委員会
図①　p.2（一部加筆）　図②　p.7（一部加筆）
写真①見開き口絵　　写真②巻末図版２



『「矢柄研磨器の研究」
岡谷丸山遺跡西区報告書
縄文時代草創期の様相』
岡谷美術考古館にて頒布
（１冊2,500円）

令和7年4月　市史編さん室撮影

発見当時の新聞記事から

同一場所から一対での出土は全国初

縄文草創期の「矢柄研磨器」

岡谷丸山遺跡

岡谷市教育委員会が、東中央通線の拡幅事業に伴い発掘調査している丸山橋近くの岡谷丸山遺跡から、十九日までに今から一万一千年から一万三千年前の縄文時代草創期の「矢柄研磨器」（やがらけんまき）＝有溝砥石（ゆうこうといし）＝が、二個一対で出土した。

長円形の石器で、弓矢の矢柄の曲がりを直す道具とされ、本来二つで一組の道具とされているが、これまでの全国の出土例では、単品としての出土例があるだけで「隣同士並んでセットで出たのは、全国で初めて」という。また「大きさ、形、つくり、完形で出土したことを含めても全国的に一級の重要資料、発見だと思う」（宮沢充則明大名誉教授）としている。

出土したのは、蓆り　表面から深さ一・六～一・七㍍の赤茶けた関　東ローム層部分の地　層。これまでの調査で出土していた縄文時代草創期のやり先型の石器＝有茎、有舌尖頭器（せんとうき）＝の地層と同じ地層。直径六七十㌢の穴（土坑）上部に、平らな面を下に伏せたように二個一緒に並んで出土した。

二個とも長円形のかまぼこ型で、大きさはともに長さ二十三㌢、幅八㌢。平らの面からの高さは十一・五㌢。平ら面にそれぞれ幅六㍉程度の溝が入っている。二つとも中央部で割れているが完形品。石質は石英閃緑岩（せきえいせんりょくがん）と見られる。同石は砥川の上流などあるという。

この二つの石を重ね合わせて、溝の部分に矢柄を通し、上下に擦り磨き、曲がりを直したり、節目を磨く二個で一組の道具ではないかとされ、縄文草創期の特徴的な石器として「矢柄研磨器」の名称で呼ばれている。

しかし、全国的に同石器の出土例はあるものの、二個が一緒に、それも並んで見つかったのは、全国では初めてといい、戸沢明大名誉教授、さらに縄文草創期や旧石器時代研究の第一人者とされる岡本東三千葉大教授、白石浩之愛知学院大教授らも、現場を訪れ「全国的には初めての出土例」を確認した。

同研磨器（有溝砥石）が出土したのは市内、諏訪地方でも初めて。県内では単品で信濃町などで二、三個出土しているという。

戸沢名誉教授は、日本の中心の位置や天竜川の源に遺跡が位置すること、近くの海戸遺跡の出土品など含め「丸山遺跡は）いろいろな文化が根を下ろした地域で、岡谷の古い時代から重要な地域だったことが証明された」と話すとともに、二個がセットで見つかった矢柄研磨器については、二個一組で使う道具と言われたきた「当たり前のことが証明された、日本で初めての出土」と、矢柄研磨器の用途、縄文文化の起源と系譜を考えるうえで、貴重な資料となることを示した。

なお、同遺跡からは、矢柄研磨器と見られる石器がもう一個見つかっているほか、やり先型の石器もこれまでに九個出土している。

遺跡の場所は、岡谷駅から丸山橋に向かうJR中央東線沿いの東中央通線一帯。

中央に直線で付けられた溝がある面の部分

「全国的に一級の重要資料、発見」と研究者

出土状態の矢柄研磨器。2つが伏せて置かれたような状態だった

↑新聞記事出典：「岡谷市民新聞」平成14年9月20日発行 第1面　㈱岡谷市民新聞社提供

岡谷美術考古館の展示

矢柄研磨器の使用想定図

矢柄研磨器は溝の入った石を二つ組み合わせ、矢柄となる木の枝や竹を通して前後に動かし、矢柄を整える道具と言われている。縄文時代草創期に特有の石器とされ、これほど大型で完形の矢柄研磨器はたいへん珍しく、対に並べたように出土した例はない。

弓矢を使うことが縄文時代の特徴のひとつであり、シベリアなどの大陸から渡ってきた石器であることなど、大変貴重で重要な資料である。

岡谷美術考古館展示の「矢柄研磨器」（複製品）
- **長さ23ｃｍ　・最大幅8ｃｍ**
- **最大高6ｃｍ　・溝の最大幅8mm**
- **溝の深さ最大6mm　・重さ各1.4ｋｇ**

令和7年4月　市史編さん室撮影

市民の方から寄せられた感想です

『矢柄研磨器の研究』を拝読させていただき、「第Ⅲ章　矢柄研磨器と縄文時代草創期の調査とその成果」に大きな関心を持ちました。特に、「３．三次元データに基づく矢柄研磨器の検討縄文時代草創期の石器」（P21～28）は、最先端の技術を用いた分析を行っています。その結果、「～検討を要する～」となっています。 きっと、矢柄研磨の技術的な方法はまだまだ解明が難しい点が分かり、単に二つの石器を合わせれば矢柄ができるわけではない事が書かれていて、私は考古学の難しさを改めて実感することが出来ました。感謝です。遺物の発見の素晴らしさ！その方法や意味や価値を検証していく地道な功績に頭が下がる思いです！！

岡谷市史編さん室　本年度もよろしくお願いします

令和7年4月　市史編さん室撮影

今年度、市史編さんにかかわる主な職員です。お世話になります。

生涯学習課長兼市史編さん室長	三澤達也
市史編さん室担当主幹	秋山仁志
市史編さん室担当主査	藤森栄太
同　担当主査	小池秀昭
同　専門職員	小林　博
同　専門職員	櫻井　洋

市史編さん室だより「覧古考新」に関わる取材の際は、ご協力をお願いします。今年度も引き続き親しみやすい紙面づくりに努めてまいります。ご意見ご感想をお寄せください。